美工生がインタビュー

建築家 乾久美子さんに聞く「美術を志す」ということ

建築家の乾久美子さんは、住宅や公共施設など多くの建築設計を手がけ、日常の風景や人の営みに寄り添う建築で知られています。本校および京都市立芸術大学の校舎設計にも関わられました。乾さんは、美術・芸術をどんな風に捉えているのか、これから美術を志す中学生に伝えたいことは何か。美工の生徒がインタビューしました。

乾 久美子
東京藝術大学美術学部建築科卒業 / イエール大学大学院建築学部修了 / 青木淳建築計画事務所勤務 / 乾久美子建築設計事務所設立(2000年) / 横浜国立大学都市イノベーション学府・研究院 建築都市デザインコース(Y-GSA)教授

美術で身につく「空間認識」と思考の力

Q.「美術を学ぶこと」は、社会にとってどんな意味があると思いますか。

A. 建築の設計に携わる人には美術系の出身者だけではなく理工学系の出身者もいます。その中でやっぱり両者の思考回路にはちょっと違いを感じています。例えばデッサンを学んだ私たちは、空間を把握することであったり、視覚的に快適であることとは何なのかとか、あるいは世の中の人はどのように物事を捉えているかということを思考する力をデッサンを通して獲得していると思います。私が建築設計をする時っていうのは、頭の中で建築物を三次元的に再現しながら考えるんです。美術を学んだ人は頭の中で物を再現する力を身につけていて、それができるかどうかで出来上がるものは全然違ってきます。

また、美術の基本を学ぶこと、補色とか、割とそういうものの組み合わせで世界は出来ていて。全てのものには形があり色がありますから、それらが一体何であるのかを把握することは、美術を学んだからこそできることだと思います。

評価の中で育つ「見る目」と精神力

Q. 私たちのように「高校から美術を学ぶ」ことに、いいところがあれば教えてください。

A. 音楽や美術などの芸術分野は常に評価にさらされますよね。そうした中で、私は経験的に精神を鍛えられたなっていう気持ちがあります。自分が作ったものを人に見せて評価されるっていうのは結構つらい作業ですよね。それを高校生からやってるっていうのは、タフな人になれるんじゃないかなっていう感覚はあります。自分の作品と他者の作品が並んで、自分のいいところもあるし、「この点においてはあの人の方が全然いいじゃないか」みたいなことが一目見て分かってしまうのが美術ですよね。その評価の中で悔しいなと思って、やっぱり努力して次はこうしよう、やってみようって思いますよね。

私はそれが美術を専門に学ぶ面白さだと思いますし、自分が次やることをどんどん見つけられる環境で、他者の作品を見る目を育て、自分で自分を強くするということが重要だと思います。

ものづくりで大切な「他者のことを考える視点」

Q. 美術や建築などのものづくりに関わる進路を考えている中高校生に大切にしてほしい視点はありますか。

A. 工業デザインや建築、絵画や彫刻のようなファインアートも、美術というジャンルにおいてものを作っていくっていうことは、やっぱり「人のことを考える」っていうことが大切だと思います。人にどう思ってもらうのか、人にどう気持ちよく感じてもらえるのかっていうことを一生懸命考えている分野だと思います。そしてこれは人間として大切なことをやっていると思うんですよね。加えてとてもおもしろいことです。例えば、海外ではダブルメジャーと言って、大学で異なる領域を学んで複数の学位を取ることが可能です。日本でもこの制度が広がればいいなと思っているのですが、美術を入り口にして他の分野へ視野を広げていくこともできるし、他領域を学ぼうとするとき、美術について知っているということはとても強いものになると思います。

多様性の社会で他者を尊重する想像力

Q. 多様性が重視されている社会の中で、「美術を学ぶこと」は他者や世界と関わる上でどんな力を育ててくれますか。また、どこからがあまりよくないとか、人に迷惑をかけるダメなラインっていうのがすごく曖昧なように感じるのですが、そういうことをどうやって線引きしていくのがいいと考えますか。

A. 皆さんの年齢にとって、まだ多様性という言葉はリアリティがないかと思います。しかし、社会の厳しい場面に出合ったときに初めて多様性っていうのがないとその問題はちょっと解けないんじゃないかって思う瞬間はあるのかなと思います。多様性と美術について考えるときに「どこまでやってることが許されるのか」と疑問に思われていることに対しては、少なくともやっぱり目の前にいる人を尊重するっていうことは絶対やらなきゃいけないと思いますよね。

その過程で多様性を認めるっていうことは、ある程度ちょっと我慢するっていうことも必要になってくる。一方で“なんでも良い”とか言われちゃって全部自分で考えろってなることは結構つらいと思います。難しい問題ですよね。でも、目の前の人のその背景を想像する、見えないものを見ようとする態度は美術が育てられる力のひとつだと思います。

◆インタビューを終えて

様々な質問に対して乾さんが一つの答えを断定するのではなく多角的な方向から新しい視点を示してくださったことが印象に残り、自分にはなかった新しい視点を獲得することができました。また「美術は人の心とモノを繋ぐ役割」という言葉や「美術は物事を知る良い入り口」という言葉にとても共感しました。インタビューを終えて、自分の好きなことを深めることの大切さ、お互いを尊重し合うことの大切さを改めて感じた時間になりました。

3年生　鈴木 いつきさん　辻本 楓さん
2年生　濱田 紡さん　山本 咲環子さん